

29 中国伝統医学と道教(第二十一回)

「鎮宅靈符」

吉元 昭 治

我が国の民間信仰である庚申信仰が三戸説から、妙見信仰が北辰尊星など、ともに道教に関係しているが、余り知られていないものに「鎮宅靈符(神)」がある。『道蔵』中におそらく唐代後に成立したと思われる『太上秘法鎮宅靈符』というのがある。今、鎮宅靈符の由来について理解をえられたいためにその前半の部分の要訳してみる。

昔、漢の文帝(前一五七没)がある時、三愚の宅といって三つの悪い土地家屋があるそうだがどんなものかと、黄帝の輔臣の一人である天老に尋ねた。天老は、家の前が高く後ろが低いところ、北方に水が流れているところ、東南が高く西北が平らなところを三愚の地というと答えた。帝はある日おしのびで歩きある所でまさに三愚の宅

を見たが豊かそうであった。不思議に思ったが一旦宮中へ帰り二人の陰陽官をつれ衣裳も着かえて三人でこの家へ出かけた。門番がいて三人を見ると主人に報せると主人が出てきて中に招き、酒食をもてなした。帝は名をきくと、劉名進という。何年ここにいるのかときくと、もう三十年住んでいるという。帝はそこで『宅経』という書を見ると全くここは三愚の宅で、住むべきでないというが何かの術でこのような吉相の家になったのだと、さらに尋ねると、初めはこの家も損耗が激しく、金銭を失い、住む者もいろいろな災害に会い、さらにお上のおとり立ても激しく貧乏の極みであった。ある日の夕方どこからともなく二人の書生がやって来て宿を求めたが、何せこの貧乏、やっとなり少しばかりの粥をさし上げた。食事が終ると二人は何でこのような凶宅に住んでいるのかと言うので、何かよい方法があれば教えていただきたいと言うと、七十二種の靈符をとり出した。そしてこれを大切にすると十年で金持ちとなり、二十年で子孫は栄え、三十年たつと尊い天子が白衣を着てやって来るといったが、今その三十年目だが未だやって来ないと言った。帝

は笑いながらその二人の書生はどうなったときくと二人は門を五十歩も出ないうちにかきうせ、後にただ白い氣が一すじ天に昇っていったと答えた。そこで帝はその靈符が欲しいというとな進はさし出した。帝は帰ってから詔を出し、天下に布告し家々の鎮宅、保護、吉を招いて人民が幸せになるようこの靈符を用いるようにした。こうすると天下は災害はなくなり、人々は福寿をまし、家々は栄え、収穫はまし、悪気を払うことができたという。この後半は七十二種がのつていてそれぞれの効能がのつている。

この靈符は、推古朝、百濟の聖明王第三王子琳聖太子が肥後国八代郡白木山神宮寺（現妙見宮）に伝えたという。こうして十世紀に入ると鎮宅の符として知られるようになり天井や梁上に七十二星西嶽真人の符をおくようになった。西嶽真人は東嶽の泰山府君が冥府を司るのに対し西嶽華山の神で現世の生活を司る神とされ陰陽師が宅神としたものである。

しかし、陰陽家が鎮宅靈符神というのは、北辰尊星を神格化した妙見菩薩と同じであるともいい、妙見菩薩と

鎮宅靈符神を併祀していたり能勢妙見宮のように初め鎮宅靈符神を祀りのちに妙見菩薩になったものもある。

律令時代、中国からやって来た道教的呪禁は典葉寮の呪禁師が司っていたが、次第に陰陽寮に吸収され一部は地にもぐり、一部は陰陽師が司るようになった。しかし時代と共に神道なり、仏教の中で姿をかえて行く。今日の地鎮祭が神官が行っているのを見れば分る。

七十二種とは周易の八卦と六十四卦を合計した数ともいうが、『太上秘法鎮宅靈符』と我が国の『鎮宅靈符縁起集』（寛永五年、出雲十念寺沢了）とは順序が違っていたり『鎮宅靈符神』（大正十年、金華山人）と較べると内容が異っている。総会ではこれらをふまえて、『太上神仙鎮宅靈符』という鎮宅靈符曼陀羅と、現在各地の靈符神社の報告をする。

（吉元医院）